

自己点検評価の結果

(1) 評価結果の概要

中期計画実現のために、15年度に設定された個別研究・事業件数は、業務運営の効率化が1件、東京文化財研究所が78件、奈良文化財研究所が55件、あわせて134件である。14年度の143件に比べて9件減少した。これは、昨年度、外部評価委員から研究プロジェクトの項目数があまりに多いのではないかとの指摘を受け、多少の整理を行った結果である。

これまで通り、東京文化財研究所部会、奈良文化財研究所部会に分かれて、これらの個々の研究・事業項目別に、外部評価委員に対して、研究・事業責任者から研究・事業内容の説明、自己点検評価の根拠となる観点と基準の説明を行い、自己評価の適否についての意見を求めた。以下、自己点検評価および外部評価委員による評価概要をまとめる。

【自己点検評価】

1. 自己点検評価においては、各研究・事業とも、全体的には、年度計画予算に対して順調に進行し、予算が適切かつ効率的に執行されていることが確認できた。
2. 当初からその扱いが問題となっていた受託事業について、本年度から以下のように取り扱うこととした。
 - (1) 個々の受託事業については、委託者が評価する問題であり、自己点検の評価対象とはしない。
 - (2) しかし、事業内容を公開する必要性から、個々の受託事業について、それぞれが関わる年度計画事業の中に枝番を付して明示し、その実績報告を参考資料として報告書に一括掲載することとする。

【外部評価委員による主な評価】

外部評価委員からの評価としては、今年度が中期計画5か年の中間年に当たることもあって、次期中期計画を視野に入れた指摘がいくつかみられた。

1. 外部評価委員からの全体的評価は、研究・事業目標および研究・事業内容については、基本的に妥当であり、年度計画における実施状況も順調かつ適切である、との評価を得た。
2. 独法化当初からの議論である定量・定性などの評価の仕方・基準については、今年度もいくつかの意見があった。たとえば、定性的評価の観点をもっと工夫できないか、あるいは、数年度にわたる研究を正當に評価されるようにする、などの意見である。とくに後者にかかわる基礎的研究や継続的研究への高い評価と重要性の指摘は、今年度においては随所にみられる。

3. 研究成果やデータベースを公開することについての要望はさらに強くなり、多くの外部評価委員が強調するところである。また、研究所の役割からみて国際的な情報発信についても積極的に行うよう要望された。

4. 次期中期計画を視野に入れた意見としては、以下のようなものがある。

(1) 東京・奈良の事業の一体化の促進

キトラ古墳の調査保存やアフガニスタンの復興支援など、東京と奈良が一体となって進めている事業について一定の評価をいただいたが、同時に、さらに両者の英知を集積する研究組織の構成の必要性についても言及する意見があった。

(2) 情報システム関係の整理とシステム管理者の問題

情報システムの重要度が増すにつれ情報システム管理者の役割も重要になり、適切な業務分担がされるべきとの指摘があった。

(3) 奈良文化財研究所の研究体制についての指摘

- ・昨年度も指摘されたが、本省の直営事業となった国有地の維持管理、整備事業について、史跡の調査・整備・活用の一体化について研究所がその役割を担うべきとの指摘があった。
- ・奈良文化財研究所埋蔵文化財センターについて、文化庁から地方への権限委譲を受けた今後の文化財行政に対応してその役割の重要性に鑑み、多様な専門分野の専門家をそろえた研究体制の構築を図る必要があること、また埋文センター全体が取り組むテーマを設定すべきとの意見もあった。

【今後の検討課題】

1. 研究成果の評価のあり方については、時間の経過とともになんとなく落ち着きつつあるように見えるが、東文研部会から指摘があったように、定性評価の観点にしている「適時性」「独創性」などの用語が適切かどうか、またA, B, C・・・の評価基準は本当にそれでよいのかなど、当初からの疑問が解決したわけではない。当面、次期中期計画に向けて検討し、より適切なものに修正する必要がある。

2. 情報公開については、年々その要望が強まっている。これまで、研究所が公開への努力を積極的に行ってきたことを評価した上でのことであるが、研究所の仕事の重要性を認識していただければいただくほど、その成果の公開と発信の重要性が強調されるようである。人的な体制の充実がきわめて困難な状況下で、どのように改善していくか英知を出し合わねばならない。

3. 独法化によって東京と奈良が一つの組織になり、最初は緩やかな統合で出発したが、事業の推進とともに一体化への要望が強くなってきている。東京、奈良は、それぞれ国立時代の成立当初から独自の重要な役割を果たしてきた。これをただ維持するという観点でなく、生かし発展させるような一体化は、具体的にどのようなものか、次期中期計画作成に向けての大きな課題である。

(2) 業務運営の効率化に関する事項

【概要】

本事業に関わる評価対象件数は研究所で1件である。

国において実施される行政コストの効率化を踏まえ、運営費交付金を充当して行う業務については、予算に対し1%以上の効率化を達成することを目標としているが、様々な管理、業務面でのコスト削減の努力した結果、2.90%の効率化（特殊要因を除く）を達成することができた。

なお、具体的な対策として、国際業務の効率化、共通業務の効率化、改組、省エネルギー、施設の有効利用、システムの構築、外部委託・事務のOA化の推進、自己点検評価の実施を年度計画に掲げたが、いずれも実施しているところである。

外部評価委員による評価結果は、事業責任者による自己評価を下回るものではなく、いずれも「A」並びに「順調」と評価された。

【外部評価委員の意見】

- ・ 業務の効率化、経費の節減とともに、施設の有効利用も進められている。特に「フィルムのコールドストレージ」は研究所らしい収益部門。今後とも、新しい収益分野を開拓して創意工夫を凝らされたい。
- ・ 効率化を図るための取り組みは、その一つ一つは些細なことが多い。しかし、そうしたことの積み重ねが大きな成果を生むと改めて感じた。努力に敬意を表したい。

(3) 調査・研究に関する事項

【概要】

本事項に関わるプロジェクト研究などの評価対象件数は、研究所全体で67件である。

このうち、東京文化財研究所に関わるプロジェクト研究は、「日本における外来美術の受容に関する調査・研究」「画像形成技術の開発に関する研究」「日本伝統楽器の変遷に関する研究」「臭化メチル燻蒸代替法の開発に関する研究」「文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と保存対策に関する研究」など38件である。

外部委員による評価結果は、自己評価を下回る評定はなく、「実績の総合的評価」および「当年度における中期計画の実施状況の確認」について、いずれも「A」並びに「順調」と評価された。定性的、定量的評価の各項目の中で1項目（研究成果の発表件数）「A」の自己評価を「B」と評価されたが、総合的評価においては「発表件数がやや物足りないが、その他の項目は特に優れた成果を挙げており、総合的に判断して、十分にAレベルであると認められる」と評価された。

また奈良文化財研究所に関わるものは29件である。その内容は、平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡およびその関連遺跡とその出土遺物・遺構に関する調査研究8件、文化財建造物、書跡資料および古代庭園に関する調査研究7件、埋蔵文化財の発掘調査およびそれに関連す

る作業の手法・技術の開発・改良に関する研究3件、科学的手法を用いた新たな保存修復技術・方法の開発に関する調査研究2件、文化財の活用手法に関する調査研究3件、文化財の調査研究および保存科学に関する国際交流・協力と国内各種研究機関などとの共同研究6件である。

外部委員による評価結果は、定性的・定量的観点の各項目において事業責任者による自己評価を下回る評定はなく、「実績の総合的評価」および「当年度における中期計画の実施状況の確認」について、いずれも「A」並びに「順調」と評価された。

【外部評価委員の意見】

- ・ 「湖畔」の制作場所の特定は重要な新発見
- ・ ほとんど未調査であった民俗芸能の丹念な現地調査により、比較研究への糸口をつけた。
- ・ 臭化メチル燻蒸代替法の研究を進めるだけでなく、その成果を速やかに公表し、知識の普及に努めていることも大いに評価できる。
- ・ 日本では近代文化遺産の保存修復に関する認識は低く、その啓蒙と修復技術の確立を期待する。
- ・ 画像形成技術の研究は作品所蔵者との共同研究という形で遂行されており、公開の方法までを見据えた堅実な理念に基づいていることも高く評価される。
- ・ 平城宮、飛鳥・藤原宮域において着実に継続される発掘調査により、新知見が多く得られた。平城宮中央区朝堂院での大嘗宮の発見や藤原宮朝堂院の南北規模の確定および朝集殿院区画施設の確認などは大きな成果である。また興福寺大乘院庭園における中世以前の州浜の発見や石神遺跡の7世紀の出土木簡も成果として評価できる。
- ・ 木造建造物保存修復の一次資料である写真・図面の目録および現状変更説明資料の刊行は、極めて価値が高い。続刊の順調な出版が望まれる。
- ・ 古代庭園に関する調査研究は、研究会、シンポジウムおよびデータベースの公開などに大きな実績を挙げたといえる。
- ・ 南都七大寺の書跡資料等に関する調査研究は、着実に基礎作業が進められている。興福寺や東大寺での文書の新発見は、古代史研究の上で貴重な成果といえる。
- ・ 年輪年代学におけるデジタルカメラを用いた方法の開発は高く評価できる。
- ・ これまで保存処理が困難であった大型クリ材における成功は評価できる。また考古遺物の非破壊構造調査法の開発等も評価できる。
- ・ 中国・韓国との共同による古代都城・生産遺跡等の調査研究は、難事業ながら着実に成果を挙げている。
- ・ いくつかの業務にみえる人員不足への対応の必要性や研究の継続性については考慮されたい。

(4) 調査・研究の成果の公表等に関する事項

【概要】

本事項に関わる評価対象件数は、研究所全体で34件である。

このうち、東京文化財研究所に関わるものは、各種定期刊行物、報告書、公開学術講座、ホームページおよびデータベースの作成管理、作品の展示公開、研究会、閲覧室運営など26件である。

外部委員による評価結果で自己評価を下回る評定は「アンケート調査の実施」について、「実績の総合的評価」で「A」の自己評価を「B」と評価された。これは「アンケートの質問、記入場所などの記入条件について検討の余地がある」との指摘であった。会場や時間等、制限された中で来場者に記入を依頼しなければならないので、困難な点はあるが今後の課題としたい。「当年度における中期計画の実施状況の確認」は、いずれも「順調」と評価された。

また奈良文化財研究所に関わるものは、「研究報告書、年報、研究論文集、図録等の刊行」「公開講演会、現地説明会等の実施」「飛鳥資料館、平城宮跡資料館などにおける展示の充実」や研究集会など8件である。

外部委員による評価結果は、定性的・定量的観点の各項目において事業責任者による自己評価を上回るものが1件（古代官衙・集落に関する研究集会）であり、「実績の総合的評価」は「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」は「順調」と評価された。しかし定量的評価観点の飛鳥資料館・平城宮跡資料館の入館者数は自己評価・外部評価ともに「C」・「B」であった。入館者数が昨年度より増加していることには一定の評価をえたが、今後さらに努力を重ねたい。

【外部評価委員の意見】

- ・ 協議会の事例発表・総合討議の内容等が正確に報告されており、今後への展望を開くものとして高く評価する。
- ・ 学際性、国際性、最新の研究動向をふまえたレベルの高い内容となっている。
- ・ 日本での研究成果、学術出版物は、残念ながら外国語に翻訳されることは少ない。日本とドイツの研究者が協力して著したこの書を起点とし、今後研究が進展すると思われる。
- ・ （IPM普及のための副教材について）高度な内容ながら、専門家でない人たちにもわかりやすいガイドブックとビデオである。
- ・ 選ばれた対象かもしれないが、広報等によりもっと参加者を集められるはず。
- ・ 成果刊行を積極的・意欲的に行っていることは評価できる。『古代の官衙遺跡Ⅱ』『平城京出土古代官銭集成Ⅰ』などは貴重な成果と考える。
- ・ 充実した内容にも関わらず飛鳥資料館・平城宮跡資料館の入館者数が目標値に達しなかったのは惜しまれる。今後は、生涯学習と結びついた講座や体験型の展示などを行い、幅広い世代の参加を図ってほしい。

(5) 文化財に関する情報・資料の収集・整理・提供に関する事項

【概要】

本事項に関わる評価対象件数は、研究所全体で9件である。

このうち、東京文化財研究所に関わるものは、「伝統芸能の画像・音声・映像資料のデジタル化」、「文化財保存に関する国際情報の収集および研究」、「画像資料の収集・整理」など7件である。

外部委員による評価結果は、自己評価を下回る評定はなく、「実績の総合的評価」および「当年度における中期計画の実施状況の確認」について、いずれも「A」並びに「順調」と評価された。定性的、定量的評価の各項目については「B」の自己評価を「A」と高く評価されたものが2項目あった。

また奈良文化財研究所に関わるものは、「文化財関係資料や図書の収集・整理・公開・提供」「情報システム基盤の整備及びホームページの充実」の2件である。

外部委員による評価結果は、定性的・定量的観点の各項目において自己評価を下回らず、「実績の総合的評価」は「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」は「順調」と評価された。

【外部評価委員の意見】

- ・ 少ない予算と人員の中では、この5年間はデータの蓄積・構築を最優先事項として活動してほしい。
- ・ 衛星画像を用いたバーミアン周辺地図の作成事業などは時宜を得たものである。
- ・ 高精細デジタル撮影は膨大なデータ量を必要とするので、処理速度及び容量において機器に大きく依存している。定期的な更新が特に望まれる。
- ・ 文化財関係資料・図書の収集、提供等については、図書データベースの導入により飛躍的に効率化した。情報センターとして、研究者だけでなく、一般利用者への広報活動も期待する。
- ・ ホームページはリニューアルにより大変利用しやすくなり、アクセスも2倍以上になっている。さらに充実を望む。

(6) 文化財に関する研修等に関する事項

【概要】

本事項に関わる評価対象件数は、研究所全体で6件である。

このうち、東京文化財研究所に関わるものは、「博物館・美術館等の保存担当学芸員研修」、「東京芸術大学との連携大学院教育」「博物館学実習生の受け入れ」の3件である。

外部委員による評価結果は、自己評価を下回る評定はなく、「実績の総合的評価」および「当年度における中期計画の実施状況の確認」について、いずれも「A」並びに「順調」と評価された。

また奈良文化財研究所に関わるものは、「埋蔵文化財発掘技術者研修の実施」「京都大学、

奈良女子大学との間での連携大学院教育の推進」「博物館実習生の受入れ」の3件である。

外部委員による評価結果は、定性的・定量的観点の各項目において自己評価を下回らず、「実績の総合的評価」は「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」は「順調」と評価された。

【外部評価委員の意見】

- ・ 様々なニーズに応じてバランス良く学芸員に対する教育・普及活動が行われている。
- ・ 多くの専門家養成を行う場として連携大学院を積極的に活用すべきである。
- ・ 文化財行政の地方分権化が叫ばれているが、地方公共団体には理化学等の専門家は少なく、奈良文化財研究所埋蔵文化財センターのような組織の存在と充実が必要である。
- ・ 他の大学院にない独自の専門領域を活かした教育であり、社会的貢献度も高い。大学院教育との連携をさらに深めてほしい。

(7) 国、地方公共団体等への援助・助言に関する事項

【概要】

本事項に関わる評価対象件数は、研究所全体で11件である。

このうち、東京文化財研究所に関わるものは、「文化財の材質に関する調査と援助・助言」、「文化財の修復および整備に関する調査・助言」「無形の文化財の保存・伝承・活用等に関する調査・助言」「博物館・美術館等の環境調査と援助・助言」の4件である。

外部委員による評価結果は、自己評価を下回る評定はなく、「実績の総合的評価」および「当年度における中期計画の実施状況の確認」について、いずれも「A」並びに「順調」と評価された。

また奈良文化財研究所に関わるものは、「文化庁が行う平城宮跡第一次大極殿正殿復原事業に関する技術的助言」「キトラ古墳及び高松塚古墳壁画の調査及び保存・活用に関する技術的助言」「地方公共団体等が行う平城京城や飛鳥・藤原京城発掘調査への援助・助言」「文化庁が実施する国際交流展示事業に関する援助・助言」など7件である。

外部委員による評価結果は、定性的・定量的観点の各項目において自己評価を下回らず、「実績の総合的評価」は「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」は「順調」と評価された。

【外部評価委員の意見】

- ・ 博物館・美術館などの環境調査、および文化財の材質に関する調査いずれにおいても恒常的にニーズがあり、積極的に外部協力が行われている。
- ・ キトラ古墳の調査と壁画保存は、極めて緊急性が高く、適切な取り組みがなされている。
- ・ 小規模ながら、法華寺の建物構成や川原寺の寺域確認等に成果を挙げている。
- ・ ドイツにおける考古展は、日本考古学の成果を示す良い機会であり、その取り組みは高く評価できる。

(8) その他附帯業務等に関する事項

【概要】

本事項に関わる評価対象件数は、奈良文化財研究所に関わる6件である。その内容は、「平城宮跡等公開活用支援事業の実施」「平城宮跡解説ボランティア事業の運営」「ミュージアムショップの運営委託」などである。

外部委員による評価結果は、「ミュージアムショップの運営委託」事業の定性的観点3項目のうち1項目が、図録等の販売姿勢を問われ事業責任者による自己評価を下回り「B」であるが、これを含めて事業すべてが、「実績の総合的評価」は「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」は「順調」と評価された。

【外部評価委員の意見】

- ・ 平城宮跡等の維持管理に尽力がなされている。
- ・ 解説ボランティア活動は、すこぶる順調で、平城宮跡に親しみ、理解度を深める上で大いに貢献している。事業の継続は重要である。
- ・ ミュージアムショップでは、もう少し「売る」姿勢がほしい。
- ・ 満足度調査（アンケート）の内容は問題ないと思われるので、回収率を高める工夫を望みたい。来館者の声を有効に取り入れてほしいと願っている。